

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊35年目 Nr. 410

2024年4月号



杉本純の原子力の話II ウイーンと京都

原子力発電環境整備機構（NUMO）は三月一日、「私たちの未来のための提言コンテスト」の受賞作品を発表した。NUMOでは、高レベル放射性廃棄物の地層処分を進めるに当たり、将来的に世論形成の中核となる次世代層に関心を持ってもらうため、学生を対象に、処分事業の理解促進につながる方策をテーマに「提言」を募集している。五回目となる今回は、二〇二三年九月〜二四年一月の募集で計一九八編の「提言」が寄せられた。

「高専四年生以上・大学生・大学院生」と「中学生・高校生・高専三年生以下」の二部門で審査が行われ、「高専四年生以上・大学生・大学院生」の部門では、最優秀賞として、東海大学大学院工学系研究科の地井桐理子さんによる、地層処分が抱えるコミュニケーションの課題と、当事者意識を生むためのきっかけづくりの提案」が選ばれた。

地井さんは、処分地選定における「NIMBY」（ニンビー…必要なのはわかるが自分の家の裏庭には作らないで欲しい）問題の背景に、「コミュニケーション方法が影響している」ことに着目。社会科学分野の考え方から、「最初から地層処分の受入れを国民に投げかけている現状が問題」と指摘した上で、「まずは議論を喚起することによって、人々は当事者意識を持つのでは」と考察。その「きっかけづくり」として、手軽に見られる一分以内のユーチューブのショート動画を利用した情報提供を提案した。地井



https://www.jaif.or.jp/journal/japan/21932.html
最優秀賞の地井さんが作成したショート動画より

さんが作成した動画では、ボール状の愛らしいキャラクターが日本のエネルギーや原子力発電の使用済み燃料などに関する問題を提起し解説。実際、地層処分についてほとんど知識のない大学生・社会人に動画を視聴してもらい、アンケートをとったところ、認知度の向上が見られたことから、「短い・早い・手軽」な情報提供手段として、ショート動画の利用が期待できるとしている。

「中学生・高校生・高専三年生以下」の部門では、最優秀賞として、島根大学教育学部附属義務教育学校九年（中学三年）の生徒六名による、「高レベル放射性廃棄物の地

層処分を目指して」が選ばれた。生徒らは、原子力発電に焦点を当てた探求の中で、地元に立地する島根原子力発電所で保管される使用済み燃料の行く末に着目。高レベル放射性廃棄物の地層処分に關して、「まず問題の背景を自分たちで調べる」ため、校内の生徒や家族、教職員、教育実習生らへの認知度調査、理科・社会科の教科書における記述調査の他、県外高校生との意見交換も実施。福井県の高専生との意見交換からは、「高レベル放射性廃棄物の問題は、日本全体の課題として、すべての地域の同世代が認識を広げ解決を目指す必要があると実感した」という。これらの活動を踏まえ、生徒らは資源エネルギー庁の職員と島根県知事から地層処分に關する認知度向上に向け、各々話を聞いた上で、「同世代同士で考えを共有する」ため、授業の場で実験を通じて科学的に理解し話し合うこと、環境に關する全国イベントへの参加などを提案した。

さて、今月のウイーンと京都の対比では、両地を発祥とする飲食物（その七）を紹介したい。ウイーンの飲料水がアルプスの山々の湧き水であることは、オーストリアでは誰もが知っている。山から湧く水は水のように冷たく、純粋で、ミネラル分が少な過ぎず多過ぎず、とてもバランスのとれた味が優れた良い水と言われている。約百五〇年前のウイーンでは、井戸からの汚染された水が、市内の病氣と高い死亡率につながっていた。そこで、一九世紀のウイーンの探検家であり、地質学者で政治家でもあったエドアルト・ジェスは、湧水が汚染されることなく各世帯に届くように、ニードーエステライヒ州のアルプスの高原台地にあるラックス・シュネーベルク山塊の手つかずの水をレンガで造った運河と三〇の水道橋を建設した。最初のウイーンの水は、パイプラインは、一八七三年のウイーン万国博覧会に間に合って完成した。皇帝フランツ・ヨーゼフ一世も、このパイプライン開発に携わった科学者を手紙で賞賛した。第一湧水本管は、一九一〇年に第二ウイーン湧水本管の建設によって補強され、以来、シュタイヤマルク州の同様に手つかずのホットホシヴァーア山脈から市に水が供給されてきた。ウイーンのカフェでコーヒーを注文すると、銀盆に乗せられた小さなグラスに入った水が提供されるが、それがこの水道水である。外国の特に大都市では安全のため水道水は飲まないのが鉄則であるが、ウイーンは全くの例外である。

り、美味しい水道水が飲めるのはウイーン人の誇りでもある。一方、京都では周囲を山々に囲まれた盆地のため、山々に降り注いだ水が、長い年月をかけて地面に浸透・ろ過され、京都の街の下にある水瓶に琵琶湖に匹敵する大量の地下水として溜まっている。この地下水を源泉とする、上賀茂神社の神山湧水、松尾大社の亀の井など、多くの湧き水が昔から有名である。お好みの湧き水を家庭でのお茶や料理に愛用している市民も多い。由緒ある料亭や蕎麦屋でも、湧き水を料理に利用しているところが少なくない。京都から毎日名神・東名を使って湧き水を運んでいる東京の料亭もある。汲み上げた井戸水を全室に供給しているマンションもある。伏見を始めとする京都の名酒もこの名水に支えられている。京都市の水道水も定評があり、原水は、約九九％が琵琶湖湖水を通じて琵琶湖から取水し、残りの約一％は、桂川や地下水等から取水している。取水した原水は、市内の蹴上、松ヶ崎、及び新山科の三ヶ所の浄水場で処理している。京都市の水道水は、ミネラルウォーターに対する四項目に比べて、七〇項目と約一・七倍もの水質検査項目があり、徹底した水質管理により、世界最高水準の安全安心でおいしい水道水を提供している。二〇〇九年に実施された千三百人以上の京都市民を対象とした「利き水」では、国産及び外国産のペットボトル水、水道水の三種の中で水道水が一番美味しいとの回答が最多の四割を占めた。ウイーンの水は、水道水はやや硬水であるのに対して、京都の湧き水や水道水が軟水なのが少々異なる。

余談であるが、ウイーン赴任中は、毎日水道水を美味しく飲んでいたので、ペットボトルはほとんど買った記憶がない。京都でも基本は水道水を利用したが、たまに近くの湧き水を汲んで、お茶などに利用した。謝礼として百円を置くのがマナーとなっている。今月も両地が発祥とされる飲食物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウイーンのカフェで提供される典型的な水グラスの写真を掲載させていただく。



■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウイーン事務所長

